26

関東大震災における佛蘭西寄贈病院

小林　晶
福岡整形外科病院

関東大震災は近代日本における未曾有の災害であった。人的被害は二〇数万人に達し、救護医療は困難をきわめた。

諸外国は救護隊を派遣した。中でもフランス（以下仏）は独自の救護隊を派遣し、ユニークな活動を行った。今回は、その概略と結果を報告する。

仏援助の特徴は、病院組織を一体として寄贈する形を取っているのが、普通の医療援助と違っていた。さらにこれは、パリ新聞組合（le Syndicat de la Presse Parisienne）の募金が中心となり、三百万フラン（当時）の義捐金を基にしている点も独特で、政府直轄の派遣ではなかった。

俗に「有馬ヶ原」と称された、芝赤羽橋近くの高台が設置場所として選ばれた。この土地は緑が多く、周囲に工場もなく、空気も澄んでいて、抜群の環境であった。東京湾も眺望できた。広さは七千五百坪（約二万五千平方キロメートル）の広大なものである。

大正一二年の暮に荷物は二隻の船で到着したが、正式に開院ができたのは、翌大正一三年二月四日のことであった。

この救援病院は正式には「佛蘭西寄贈病院」と命名され、臨時震災救護事務局に委託された。遅きに失したこの設置は、仏側も大量の荷物運搬と遠距離を挙げて恐縮している。また、わが国の政府が、受け入れを即座に承諾したわけではなく、独自で復興する意気込みをみせたいとの、自負があったと想像される。当時の駐日仏大使ポール・クローデルは、最後に受け入れられたことに、間に立って胸をなでおろした心境を述べている。

病院は野戦用テント（幅六m、長さ一八m）三二張りが利用され、X線室、手術室を備え、五百床設置が可能で、救急車五台、消毒用自動車、発電用自動車、トラック二台まで付随し、医療材料一式も加わり最新

式のものであった。医員としては、茂木蔵之助院長、正木俊二（不如丘）副院長以下一四名が嘱託された。

前述のように、救急という意味では開院が遅きに失し、漸く被災患者数も下火になっていて、しかも周辺に幾つかの大病院もあり、普通患者がそれほど多数来院するのは望めなかった。

このため運営の方針転換を計り、仏側の了解をえて、虚弱児童の育強事業（当時の正式命名）を主とすることにした。

市内の小学校の協力で、虚弱児童を収容し、三週間を一クールとした。閉院（五月三〇日）までに、六九五名の児童が入院し、対照として強健児童二組、検査データの健常対照として、慶応幼稚舎児のものが使用された。これを扱う小児科主任としては、鎮目専之助医師が就任した。

育強法としては、規則正しい生活、衣類を統一、蚤・虱・寄生虫の駆除、管理された食事、運動、遊戯、日光浴、精神的慰撫相談、音楽会、普通学科教育、口腔衛生などを主眼として実施した。

健常組、慶応児に比較し、虚弱群では入院時、身長などの計測値は全て劣り、栄養指数も格段の差を示した。また、胸郭、脊椎に異常が多く、驚いたことに、ピルケ反応、X腺の肺門リンパ腺腫大を基準にすると、潜在性結核と考えられるものが、四七・九％もいたことであった。その他、起立性蛋白尿、扁桃腺肥大症、慢性化膿性中耳炎、耳栓による難聴なども、健常者より多く見出された。原因としては、入院前の家庭環境、食物の量質などに帰すべきものが多かった。しかし、育強法により、諸データは著明に改善している。この種の施設が、今後わが国に多く設立されることを行政当局に希望して、三五六ページにわたる報告書は終了している。